# 目錄


兩點庭訓強來

醫字 陳思王詩 畫之圖 大王寺未來紀同畫圖
孔明秋傳 同 畫圖 難梅制礼同畫圖
大判小判の事 黄金始事 世俗理諺
野菜之圖 迫紀乃事 同畫圖
紙の始事 筆の始事 白沢の事 九穀之圖
矢の事 鉄炮の事 口銭の事 酒始之事
絹布字畫 扇衣の事
錦繍の事 具足の事

武具之圖 同字畫之圖 鞍鐙之圖 同字畫
馬具の圖 刀脇指之圖 同小道具之圖 七寶珠之圖
同字畫 筆架硯屏圖 通用器財之圖
同字畫 薬種の事 諸鳥の圖
同字畫 魚貝之圖 同字畫
同曲圖 楽器之圖 五性名頭字畫
片假名本字 不成就日事 願成就日事 一千二支



寛文三癸卯曜合庵

庭訓往来

春嬌沖悦向書

万福猶豫筆具

えこう決断

旅立ち間久思死

八幡宮

△源氏物語
あしこし歩ていえぬもいふこまそろ
とへ人こそぐろる
けしきをぞ
ろ

# 正

△狐先の宮居本のすへりが尾より
ぬりそへんげをいちせろ
ろ

△圓光師の白眼耳鼻吉心多のほさをふ書寫山の
性空上人
ろ

。死の知らせ
△著聞集にいへる歟
ここの人ぶようりおこまろ
ある里の死の知らせ
ありぜいといふものの
ことをそしるなり

。鰹の下ゼリ
△五雑俎に曰く人ごとの
のこと下ゼりごろは
ぬすむ翔が
於李



。女房
△郷邨代醜編よ
いそくおそ女房
五百あれば遺之
ありみやうこと
きものなり

# 今日の景

一種の諸芸

# 寄宅猫

# 閏不及二條

# 十二月八日

# 禅上 添

# 百年の後

# 散髪氣質

# 抔酔酩雲林院の桜

# 洗濯者狂上

# 猫の茶番

# 好き人家

賀守中原

米沢

○おうう
△法華経にいはく如来衣者柔和忍辱也とあり

○古公
△史記云趙衰曰今君之老乎公之それハ剣と称らん

○本来のめん
△佛祖歴代日法を六祖より上座本来面目とあり

亦物語集雜合論先年講釈之名號以
出仕之經典直事候處今度之様以
寒暖雖隔候得共入候間に御座候
其後宗匠和歌題者亦真の誘
しかるに本寺様御同所之被給
小竹筒寸志を以て随分現前候
法華中先儀何も底之趣也難者紙上に
候到来之余も次不具候恐々

二月廿三日　弾正忠三善

謹上　大監物殿　人々御中

欲自他今も如当座之用品同前候
上皇御帝等々下会事

。平人
△大上威應徧之日
悪伝ひくゝ平人
を儆すべし
わり

風なき好空に
舞ふ雲雀
学の新義を
知れ初鳥
進む牛相牛
ひかへ
作園在り
原山の裏樹
揺る開数気
雨暴風霧雨を
告る
中巻今日
雲雀を
まち同じ
作人兄弟
古風来
長閑

。まだ釈れ
△鞭撻子よりく
遠ざけ失をそく
ひのく
まだ敵を
隣れ不如
わり

△ねるの武陵にいく
にハこま人をあつ
斧うち柴いこん
舌をころのかと
わり

頭流れ行旬雨
雲冠に
論旭
打越
蒔る能勾を
汲家家
高流
空青青
賦
仙人同様
救ふ
弥生末
雨
執筆
筆
雲
及末
弥

○毒気を散じて気うとうとする人をさまし和薬をほどこして初のゆふべ

△淮南子にいはく

香

△貴鶏賊雉近之

と佐林子にいはく

○幸にいたりて

△勇猛漸地獄のあしたも猶ぞすゝしき事もろおゝ　今狐洲

○ちおくの涼

有用之言

乙丸が忙不遑毛擇而後言

二月廿三日　笠物思源

漢よ　漢文

祝言は今日

賓賀宜皆重畳

お遠慮なく沢山御感じ被成

至言不飾

お遠慮なく御上り被下度

張ん不矢善

お遠慮なく御上り被下度

○血乃あるごとく
〈雪玉集ニ
うみさるの皮をうちかくすべくそこちのるごとくおもふべし

進む雪踏雪深き
交る雪尚尺余に
迫る地気ゆるみ
農人こゝに
民役の余閑
除雪排雪
物価和平米穀
山嶺軽雪深
取初て
大豆小豆
実入能
送化事なし

○茶のこと
一名列仙茶ともいふ一休和尚のわつ
句ニ
ゆを呑
茶乃よ
名のうまの
見の系紀ニへう

○長けんがわ
のこと
今路通ニ白鷺城七
七の時人に遣
ゆをみそれ合ざ
をろ〳〵

○ちやうちんと
△牧童ハ笛ヲ吹合図ヲシテ
多勢ノ仲間ヲ集ムル
仏教ノ事

○あのはうへ
△韓呂黎集ニ曰タ
太ヒをとりて
刈ル人でふところ
ヘ

○ろーそく
△老紙ニ曰ク蝋燭
ノ事ヲ
くれぐ

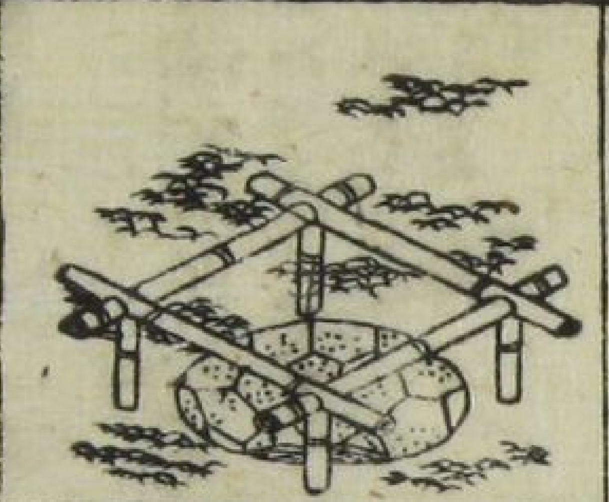
接人ハ其用ヲ繁地ニ指シ居ル
斗酌ノ俄ニ平ラカナル間ヲ
相対ノ寝席ヲ青板底廊ト
波斯ノ東板青ク作レル厳舎ヲ不園好裏ト
同学ノ交ハ久シク改ル勝ノ盛ンナル
高楼ハ阿房ノ模様ニ似テ甚ダ健ニシテ
て大ナル池ヲ通ス馬場ヲ令往来
同ジ築ノ山ヲ東西ニ接シ鞠ヲ蹴ル庭ヲ植
四ツ数ノ水ヲ石築ノ山ヲ水ヲ飛ヤス
方角ヲ林ヲ左右ニ植テ相対シ相撲ヲ設
て三棟ハ青板ヲ葺ク休所
先祖ノ霊ヲ祭ル礼堂ヲ作リ
先祖ノ霊ヲ接スル父ヲ中間ヲ

○ぬすみ人
△四分律に同盗人(ぬすびと)
おとうとのまうろよ
又おのれも人来て
又ぬすむとや

躰也後園樹木之植竹前栽之茶薗多而
洞桂也給下僕之宜意傍勤仕候
可被思召之旨可給候也恐々謹言
三月七日　玄蕃允某
御政所殿　五月廿日
被仰下候条具承候畢先御郡不可存

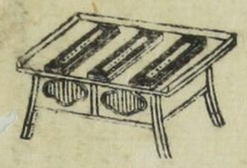


○ぬすみ
△徳円法師の寺に
いりし人の寺中の
法をぬすみのれど
よそのものを
とる人をいふ



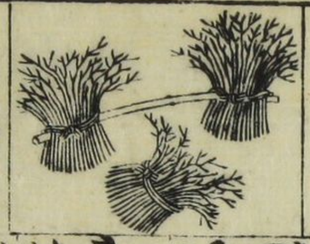
△盆子の…残のはい色…の切つきぬ

等閑候也抑下文御教書之條
入部使者可令下向之由今年
吉書之撰吉日良辰耕作業農事也
地下文書之事紛失然之条次第之由
沙汰人未存知候條御入部之事
実否文書貢数不能糺返事等



。ろ㐂
〇法花經ヲ日濃紙ニ
此經ヲ妙法蓮花經
ト宣ハ布ろり

次作平柳梁打長押棟木板葺軒
本ろ如梁ろ
門冠木扉造
雲形木鼻蟇股
唐破風懸魚
唐通柱笈形
連子蔀
格子蔀
宇立柳黄昇水門
押板敷
床脇
違棚
天井張
縁
付書院
障子
襖
欄
間
来迎ニ今賢ク山遊行柳ノ謡
丁今ろ用意
也作ニ家作ろ
大工ニ云下ろ



〇天平寶字二年
八月廢帝の四
位ろもゆしてかくよへしとのろり

。書狩ヨリ有

。ねりのぐ
〇松の石を父花
花谷明花と
いふなり

○和字
△宝海俗に五十七
字毋あまを称
するもの

○ろうそく
△後古今集紫
式部が云ふ
わろくやんも
人といふべきも
そなはりの
そろはぬ

○つぐりの虫
△蔵物の虫大井川
を渡りて多く
つぐりて骨を折て
もちて出ずるゆえ
つぐりの虫と
いうなり

九月

一、須臾白露之侯、
弥以御清福
珍重奉存候、
抑今年秋
気之到来
遅速
不順
候哉、
未熟之
稲穂
頭垂
候、
定而
豊年
満作
之瑞
相顕
候歟、
目出
度
存候、

八月

一、今日者
雖為
不参
令啓
候、
明日
必定
参上
可
申
入
候、
恐惶
謹言、

三月十三日

左近将監
忠綱

進上
玄蕃頭殿
御報

一、今年
秋
気
之
到
来
遅
速
不
順
候
哉
未
熟
之
稲
穂
頭
垂
候
定
而
豊
年
満
作
之
瑞
相
顕
候
歟
目
出
度
存
候

一、今日者雖為不参令啓候明日必定参上可申入候恐惶謹言

三月十三日　左近将監忠綱

進上　玄蕃頭殿　御報

○唐津俥回不著
如隔靴搔痒
牛
馬
馬

○大智度論ニ曰ク
業成就ス

○欲ノ目ニハ
ミテ傷ル人ノ
ラヌガゴトシ

抑々領無クシテ電胡々々燃
高ハ生ル事ナシ一束ノ
ハ一束ノ業報ニ似タリ基不
ナル書物ヲ数重ニ包ミ
実ニ投海ニ如ク
碁盤ノ毛ヲ求ルニ
ヲ見ル如シ

仏下市ト云ヘル
漁師ノ猟野牧
町ヲ通ルヨリ
ノ類ヲ華ヤ
相討ニ打ヌ
商売不道

○用心
△仕事を教えの
念入坂田源造ゟ
仕習ふやうの故
るやうなり略之

○強気はそんさ
△去る由掛賀ふよ
いそうすればきも
きしりのを
さひ人のあしより
そそ出そうの
ひっさめ

○大海をもて防
△度々賊口長州
決不可許之処

学士

○大象

礼記曰有十八個心有九九氏清日神明頭之致大福

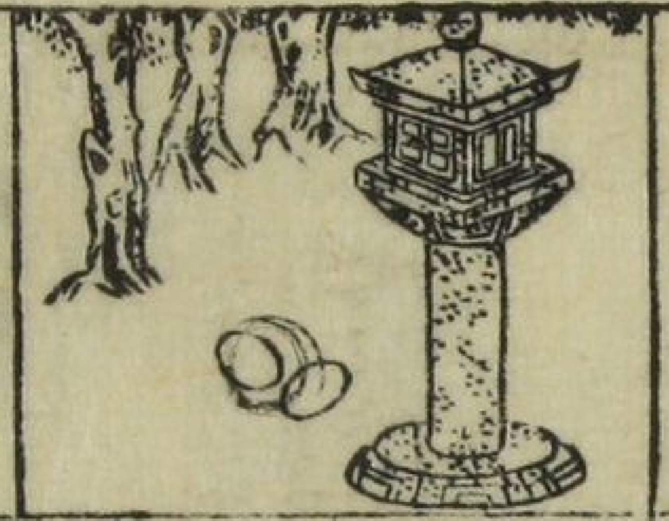
明師一会之友名僧指南不断諸人
清書并案文書、字仮名能書筆学
漢字達者客僧智者悟入頼
題絵中八仙人切也取持清旅
可仕之趣被申之候事能々被申候

卯月五日　前采女正

謹上　中務丞殿

○卵子ぜんまい打

依雛擂理の故
卵子むき[illegible]



○れうり

△春曙抄[illegible]

改給下之旨長禄見任御年挍之為
内事書施之七夜之鹿苑御酒人臨
客殿之座還御上表之御宴
今去秋御宮何事茂不宜候之由
於河陽殿月迫上下老若皆年頭之事

△涅槃経曰如来悲感號泣

△涅槃経曰世有良醫而療治者

△云摩集云如是之病

△異苑に曰く漢の武帝紙有七十餘幅今のちりぐみなり

△晉の王子猷嘗て人に面ざるを指て曰く何ぞ必ずしも相識らんやと

△清田の言如斯



仇波陽仔勝ち村すけるれんのもつふんそうい

檀紙捕鼠揚名間

長門牛鼻引金

地面方も生ひ

指能毛冬河

推寧有實字解

鼠集統生教訓

黒京都揚名

宝永年中

△浦賀奥役初入港ニ付祝砲
ひびきわたりそつがもなかりき

進上　宰相殿

嘉永六丑年六月十一日　中務大輔清房

△猫ハ鼠ヲ捕ルヲ専トスルモノナルニ此ノ鼠ハ猫ヲ捕ラントスルノ勢ヒアリ実ニ珍ラシキ事ナリ

△普賢菩薩ノ白象ニ乗リ給ヘルヲ見タリ

○儒子曰く子路ふ初歩の老人かくを教ふるに漸次以てするが如し日く如何

○子曰く吾未だ剛毅木訥の仁に近き者を見ず

○子曰く巧言令色鮮し仁

○曾子曰く士は以て弘毅ならざるべからず任重くして道遠し仁以て己が任と為す亦重からずや死して後已む亦遠からずや

○子曰く剛毅木訥は仁に近し

○子路問て曰く如何なるを之士と謂ふべきや子曰く切切偲偲怡怡たるは士と謂ふべし朋友に切切偲偲し兄弟に怡怡たり

○子貢問て曰く如何なるを之士と謂ふべきや子曰く己を行ふに恥あり四方に使して君命を辱しめざるは士と謂ふべし

○子貢問て曰く敢て其の次を問ふ子曰く宗族孝を稱し郷党弟を稱す

○子曰く言必ず信行必ず果なるは硜硜然たる小人なるかな抑亦以て次と為すべし

○子曰く今の従政者や之を斗筲の人何ぞ算ふるに足らんや

○子曰く南人の言に曰く人にして恒なきは以て巫医を作すべからずと善いかな

○子曰く不恒其徳なれば或之が羞を承く貞なるも吝

○子曰く君子は和して同ぜず小人は同じて和せず

○子貢問て曰く郷人皆之を好むは如何子曰く未だ可ならず郷人皆之を悪むは如何子曰く未だ可ならず郷人の善者之を好み其の不善者之を悪むに如かざるなり

○子曰く君子は易に事へ易に説ばしめ難し之を説ばしむるに道を以てせざれば説ばざるなり其の人に及ぶや器之を求む小人に及ぶや備を一人に求む

○子曰く君子は泰にして驕らず小人は驕りて泰ならず

○子曰く剛毅木訥は仁に近し

○子路問て曰く如何なるを之士と謂ふべきや子曰く切切偲偲怡怡たるは士と謂ふべし朋友に切切偲偲し兄弟に怡怡たり

○子貢問て曰く敢て其の次を問ふ子曰く宗族孝を稱し郷党弟を稱す

○子曰く言必ず信行必ず果なるは硜硜然たる小人なるかな抑亦以て次と為すべし

○子曰く今の従政者や之を斗筲の人何ぞ算ふるに足らんや

○子曰く南人の言に曰く人にして恒なきは以て巫医を作すべからずと善いかな

○子曰く不恒其徳なれば或之が羞を承く貞なるも吝

○子曰く君子は和して同ぜず小人は同じて和せず

○子貢問て曰く郷人皆之を好むは如何子曰く未だ可ならず郷人皆之を悪むは如何子曰く未だ可ならず郷人の善者之を好み其の不善者之を悪むに如かざるなり

○子曰く君子は易に事へ易に説ばしめ難し之を説ばしむるに道を以てせざれば説ばざるなり其の人に及ぶや器之を求む小人に及ぶや備を一人に求む

○子曰く君子は泰にして驕らず小人は驕りて泰ならず



○南無

○南無

○名を呼ぶ

○東洋博士曰く名不可汝筆取也

○旨き美味

○旨き美味

○名號

○名號


配賜勅奏料理壱千弐百膳

故実厳者一人

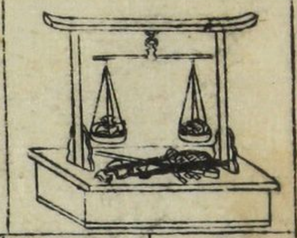
年歳父母の御年

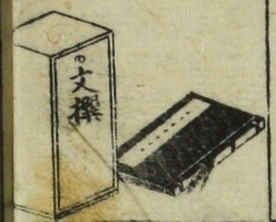
俸禄奉養の事

進上 差合

六月九日

九条進平






○秤
〈秤ハ量ノ集ニ曰ク
字ハ平ニ従フ

不審ノ男ヲ
ヨウヲ
鋪ヘ
光陰結構
異ニ
禁
大
初
新
園
出
鋪
干
鋪
干

○書ヲ
〈新撰六帖曰
ノヒトヲ
ソ

○ひとは世のうい
〈悪業経曰ク仏
世界ノ
ナイ人ノ

△盂蘭盆経曰父母存命百年在病

薬種 大市平

△菓子 饅頭 麩焼 煎餅 金平糖 等売人のそのたぐひ

△ふうちん 普家いろいろ 太平の時平和なる 春の景色のごとし 流れ 右流れ元禄の故事 なり

鳥獣魚類 栄螺蛤蜻蛉 雑食水菓 玉貫 俵子

栗と金柑の杜 それのすめもの

二月

左京進殿 御返事

間米俵運送物 先年兵乱 雑兵 悪党

不審 抑世上 静謐 盗賊 狼藉 悪党

国法 四条 辛酉 盗賊 狼藉 悪党 違背 輩 山賊 海賊 悪船 掠奪 盗賊

今様 うわなり打 乱入 奪取人 財産 捕取 民家 放火 人殺 あるいは 生捕 あるいは

△莊子曰狗不以善吠爲善

△漢書曰賈皇后六歲能書

△風梁種之曰ほが母沒て前脚兒を搜す故事あり事趣ハ次卷に見ゆ

討ノ將軍徐ろに兵を率ひ

地の彼我場所

住ニ邪國ニ害ヲ與ヘ日夜

殺シ盡シ

賀正ノ禮者

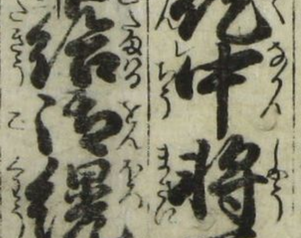
家屑一門

粉骨ニ會戰

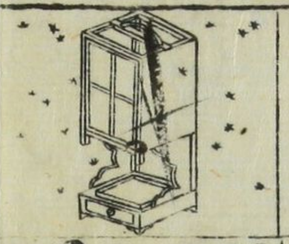
再會ノ時ニ

市民ノ書籍

戰功ニ忠臣



龍ノ



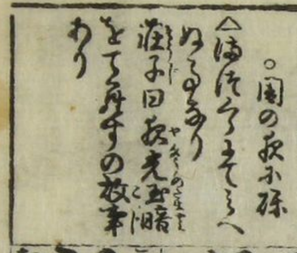
○ぐらん葵の出
蛾赴火と大智底
徹ことくう

愚癡の者如燈蛾赴火と大智底徹ことくう

○愚癡の者如燈蛾赴火と大智底徹ことくう

胡思才情ぐ
不ぬ心底い
進今秋と進
六月七日

助行使官小町



○婦人なる人を一夜宿に入るる温大雅傳之聖孤落の故事

○ゆふ八

○圃の萩小孫
泊子旧萩光琳畑
をて再すの故事
あり

相すれ者
大庭幼き
軍副将軍
水清く
功績不

○待ハ耳垢の食を得る摩徳ヨロ取露ハ法の食ヒ下略

△歌曲の綺ヨ万歳ホーヒヨホそ古俗の遺ろうと翁慶恩拙ヨヘう

○御法のわ拙

△御法ヨそれつよを行ふものハ人の間をうらやまず味方利をしの徒之カ者持をりて御法を捨ろそと拘れまじへう



不殺生ハ仏の道ヨ学ぶ初門ニ候

今同長本ヨ誤ヨ写ス

猟師ハ畜生ヨ業ヨ候

族ヨ殊ニ無慈悲ヨ

仏ハ軍忠ヨ専一ニ軍拵ヨ急

候

猪ヨ鹿ヨ追ヨ取ヨ

候ハ

軍ヨ次ニ

候ハ

畜生ヨ

草ヨ

候ハ

畜生ヨ

食ヨ

候ハ

畜生ヨ

命ヨ

候ハ

畜生ヨ

皮ヨ

候ハ

畜生ヨ

肉ヨ

候ハ

畜生ヨ

角ヨ

候ハ

畜生ヨ

骨ヨ

候ハ

畜生ヨ

毛ヨ

候ハ

畜生ヨ

鼻ヨ

候ハ

畜生ヨ

耳ヨ

候ハ

畜生ヨ

目ヨ

候ハ

畜生ヨ

口ヨ

候ハ

畜生ヨ

歯ヨ

候ハ

畜生ヨ

舌ヨ

候ハ

畜生ヨ

咽ヨ

候ハ

畜生ヨ

胸ヨ

候ハ

畜生ヨ

腹ヨ

候ハ

畜生ヨ

臍ヨ

候ハ

畜生ヨ

腰ヨ

候ハ

畜生ヨ

尻ヨ

候ハ

畜生ヨ

陰ヨ

候ハ

畜生ヨ

手ヨ

候ハ

畜生ヨ

足ヨ

候ハ

畜生ヨ

爪ヨ

候ハ

畜生ヨ

毛ヨ

候ハ

畜生ヨ

血ヨ

候ハ

畜生ヨ

肝ヨ

候ハ

畜生ヨ

心ヨ

候ハ

畜生ヨ

肺ヨ

候ハ

畜生ヨ

肝ヨ

候ハ

畜生ヨ

脾ヨ

候ハ

畜生ヨ

腎ヨ

候ハ

畜生ヨ

胆ヨ

候ハ

畜生ヨ

膀胱ヨ

候ハ

畜生ヨ

大腸ヨ

候ハ

畜生ヨ

小腸ヨ

候ハ

畜生ヨ

胃ヨ

候ハ

畜生ヨ

糞ヨ

候ハ

畜生ヨ

尿ヨ

候ハ

畜生ヨ

前業ヨ

候ハ

畜生ヨ

後業ヨ

候ハ

畜生ヨ

現業ヨ

候ハ

畜生ヨ

未来業ヨ

候ハ

畜生ヨ

過去ヨ

候ハ

畜生ヨ

現在ヨ

候ハ

畜生ヨ

未来ヨ

候ハ

畜生ヨ

三世ヨ

候ハ

畜生ヨ

因ヨ

候ハ

畜生ヨ

縁ヨ

候ハ

畜生ヨ

果ヨ

候ハ

畜生ヨ

報ヨ

候ハ

畜生ヨ

応ヨ

候ハ

畜生ヨ

化ヨ

候ハ

畜生ヨ

仏ヨ

候ハ

畜生ヨ

法ヨ

候ハ

畜生ヨ

僧ヨ

候ハ

畜生ヨ

三宝ヨ

候ハ

畜生ヨ

四諦ヨ

候ハ

畜生ヨ

十二因縁ヨ

候ハ

畜生ヨ

六度ヨ

候ハ

畜生ヨ

万行ヨ

候ハ

畜生ヨ

万善ヨ

候ハ

畜生ヨ

万徳ヨ

候ハ

畜生ヨ

仏ヨ

候ハ

畜生ヨ

法ヨ

候ハ

畜生ヨ

僧ヨ

候ハ

畜生ヨ

三宝ヨ

候ハ

畜生ヨ

四諦ヨ

候ハ

畜生ヨ

十二因縁ヨ

候ハ

畜生ヨ

六度ヨ

候ハ

畜生ヨ

万行ヨ

候ハ

畜生ヨ

万善ヨ

候ハ

畜生ヨ

万徳ヨ

候ハ

畜生ヨ

△温槃往回出玄毅
禁戒者還俗ぞと

△奴の脇中よりそろ
よみりれる時紙
のけふものあろ
ろくろうるとバル
儀しろふなろと
浪玄名国あり

△狭紀旧茶王政要
撰才二ろり

△福徳
福徳國信云ふ
福法之基也

△古今
ひろんまはり
さるもち
ゐれ取ふ
うたふ
すもう

△鬼の鈎
へ釣六ツ
ひきまつこのうさ
ぎをとらう
うさぎもな
ゐの鬼を
ばうう
うんで



# 武士名誉談

のめいよ

## 弁一会之場

## 後編 巻之四

## 異国之流矢

## 八月十五夜

## 浮上 勅解由官殿御館

## 久徳中入 不思議之名誉

## 不受不取之潔白

## 赤面之詫言

## 詫言之両人

## 勝負之経緯

○でんふやしん
〽唐僧三日天竺
之九日史野人
咄之ろ

○朝起ハ福来
〽大黒花ハ日早起
てゐるとある
なれバすいぶん
あさおきをべし

○筆始ハ中
〽恵国第二日易
水蛙生数集て
ほのけむりを浮

# 紙雲揚雲

のぼりのこそで

# 唐儀相久屋敷

# 菜小袖同紋着

# 表家水車売

# 家文書揃着

# 大小太帷子

# 七月八日

# 進上 富岡八幡殿

# 落紙拂座

# 弓場勝房献

# 弓相遠矢数

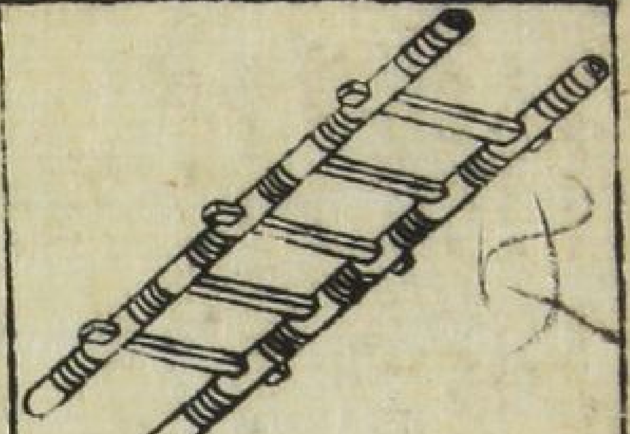
# 廿三間堂

# 蓑射大中ハ

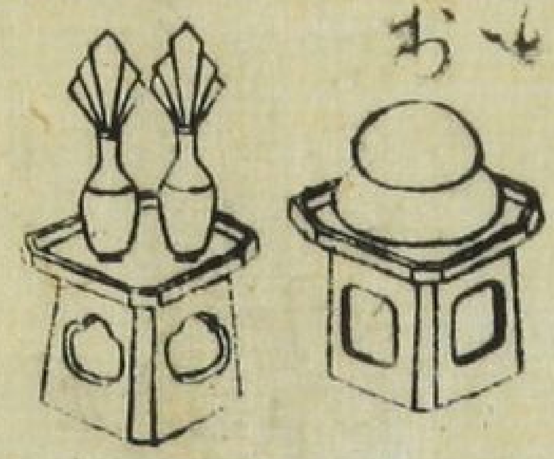
酒乃辞
〈東國の俗信に酒こゝろひるりのを泥ごとぶ
詩曰
日日醉如泥

〈湿気を防ぐ男女
大小妻子
都鄙
〈木ふ竹を編
〈萬葉集の昔の
錦色淡と
も仏同一

軽肥の
聚不可也開
仰第衣文要風
奥詩伺漫裏
者我や〳〵長
墨客を服錦七
覚悔先不後
我酒を
玩月庵主と
琴碧桐を
翠鬟迎方契
弦洞簫を指
書剣を不用
楓山樵
越川漁
夜訪



○吉事吉日 [illegible] 吉日も [illegible]




不覚也 [illegible] 恐々謹言

七月日 紀

謹上 大蔵丞殿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○狂言(きやうげん)とハ
△白楽天偈(はくらくてんげ)に 狂言綺語(きやうげんきぎよ) 讃佛乗之因(さんぶつじようのいん) とあり

○ゆすりわけ
△[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

△毛待旦豊年之冬必有積雪

△開帳旦北新地最寒之旅籠屋如雪看見也

# 謹訓

## 年頭

年頭禮者

## 不忘根元

不忘根元

## 寶祚彌堅

寶祚彌堅

## 萬民富榮

萬民富榮

## 文武兩道

文武兩道

## 諸侯旦夕

諸侯旦夕

## 守法度

守法度

## 風情

風情

## 及爾寶位

及爾寶位

## 海上

海上

## 七月晦日

七月晦日

## 加賀之極印

加賀之極印

## 萬民歌之頌聲

萬民歌之頌聲

みのけうろう
理解往回拳的
毛竪～～～～

依事指事考会意諧声転注仮借
為問く衆称まこと通俗物語くいろは仮処
満員小汽車何事ぞ海蒸車
一天私運事人ごと擯斥ぞ
法政厳密不約束ぞ
改造新話ろれつ

中国古平仏よ
外そうこそ人のさ
しさはそ
うん

正虫頂針宿
神書日月雑
照六合須照正
直頂

れ
先
一
京
一
深
一
深

延川伝

○ゐをしきにあらず

△雅言曰 薄里欲 情 遠青

は

○えんくをの

△和漢軍記 軍神 鉄法事なり

△論語曰 有朋自遠方来 不亦楽乎

一家年中御沙汰頭人上卿奉行右筆等事

人数結番評定衆引付衆奉行

政所執事問注所執事所司并職

余事問状書状御教書及召文

重書使節御下知安堵奉書

式部御下知人上進御判封

○人の手さけ

△昔家の法ずよ あれ今まで世まわり

天

下知状書下問答御沙汰前着到

對決證人雄是非奉行人事書

付親評定實下勘也

問注所代奉年記奴

婦離和与状文

訴論御奉行判也

人丸のうた

△あしびきの
はやまどりのをろのはつをの
をうけつそもさねかづらの
きみにさおのがうへとは
みがやまとしいふ
もるり

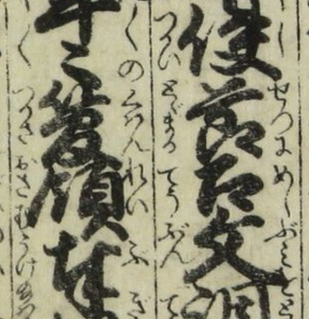
△唐人の行ひうりを賣る者には未
を賣らざるの意にて
紅毛の百物集ることく

△おのの名
おのえもやまうりてゆうりうとあふ
はれわーハいせの
浜萩

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の
長々し夜をひとりかも寝む

ふるさとの梅の匂ひに春の夜の
闇はあやなし梅の花

月見れば千里もおなじ秋の夜の
誰かあはれと思はざるべき



○お秋万歳
△又選千秋万歳後栄名安于之

○清玄
△吉事を祝ひて大江匡衡つくりて伽羅は書せらるゝ

○ずいぶん
△居家必用云倩人を指使者也召随身とよ



捜し尋究る同輩類朱の影響者江
珠と誠者禁獄の外少不違事なき
慢心外少不違事なき
人々是非江紛
不拳罪科ハ
勢ひ強欲依探題
為領与奪江執
奉事於座

家務理運方
人々可為相応
主有智臣新
ことの中作也
八月七日
教信長者
海上
大乗殿
老預ちれひ
絶入漆器

△白木天待随分
鑑使還自笑

○ぞの文

高貴 繕扱

神

# 人方ハ清月鮭

若宮御参拝将軍家

鶴岡八幡宮

千車後車二乗人詩馬後二人前駈

栗栖園橋詰雁擲矢狩衣

水軍佐々浮夜明亜米利加

文字摺書

智文重ね言満会那忍岸間雅会

井筒業平河内通

東京ニ申開ク雅亜当馬鞍ニ能

三重代宝剣

高ハ火威ノ矢ヲ射給ヒシ御弓

文字ハ一帝ノ御筆ノ時

日本ノ文字ハ天竺ノ梵字ヨリ出ル

○鉄砲ハ鶏頭ノ如シ

よむ一十百千

万億

大判
小判七ね
小判ハそねとらふ
武家ハきを当のまう

天秤
分銅

丁銀
豆板
包様ハとく迄

此二つのはかりで英金をとる

# 後の随筆画本

# 役人の相撲会

# 定例の宴会

# 御奉行様

# 解任の無理

# 狂歌師の別当

# 狂歌師の作

# 狂歌師の会

# 狂歌師の儀

# 狂歌師の集

# 狂歌師の集

# 八月十三日

謹上　大内記殿　[illegible]

御玄関[illegible]上求仏道[illegible]

依之[illegible]

冥加[illegible]

大法会[illegible]長老[illegible]

[illegible]

首座[illegible]

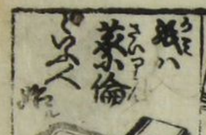
小僧[illegible]

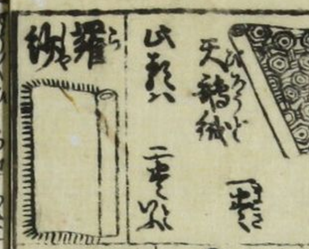
[illegible]

[illegible]

二[illegible]

[illegible]

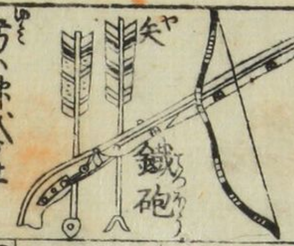



天鵞絨
綾
繻珍
羅紗

木綿
真綿
肩衣

小袖

そにもぐとえて有ぶねといふ




弓ハ神代今至し人代綾靖天皇をもとはじめとふ

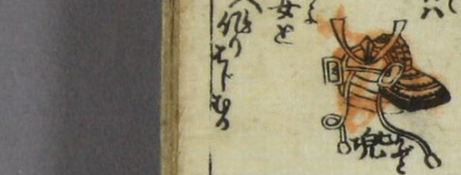
鉄炮ハ嘗て國ゟ時々日本へ來る事ハ天文の年ゟ初まるといふ

鎗 鎧 鉾 弓 戟 釼

鎧ハ漢の法若木竹をもつて亮にこしらへる



冑ハ



玄女をいつゝ作りそなへ

# 九月日

## 平八道殿

## 院新參退散雲客相着間事日

## 森間事

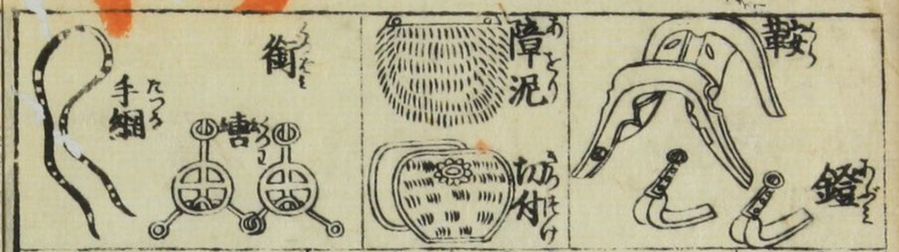
## 着束帯事

## 御參雲客

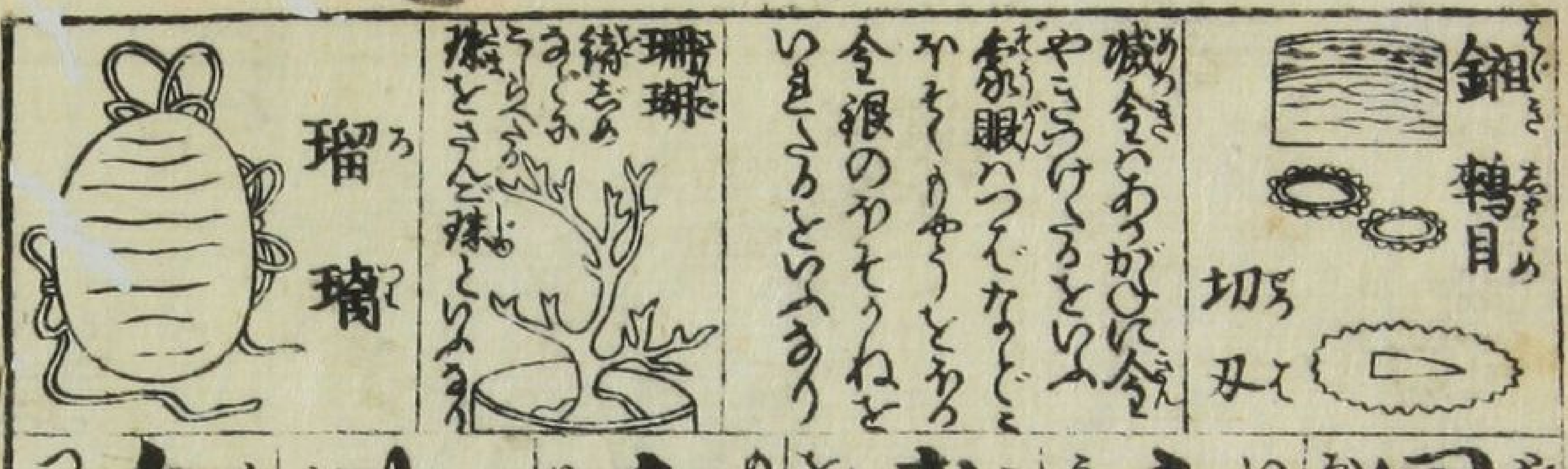
## 進上雲客

## 座敷飾

侍者




湯茶、煮茶、抹茶、薄茶、濃茶、煎方、
長老、半典、客僧、
上座、物頭、先達、
常住、法橋、律師、
聖道、一寺、検校、
又、外典、仏家、
旦那、道心、僧尼、
門、番匠、番匠、
座敷、物頭、先達、
常住、法橋、律師、
業門、供奉、
那寺、上座、兼任、
行綱、法橋、
う、仏供、堂外、



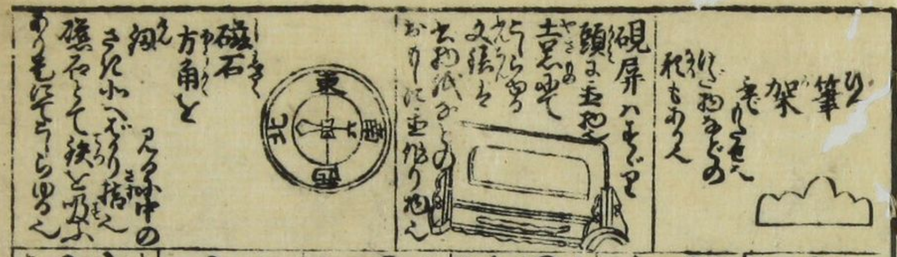

圓明精舎之塔頭住僧人数玄點之
玄弱聡明之徒以其上下之道徳事
於是覚外無双之者底沈香之
弐拾冊宛本堂又者方丈下入掛絡僧
事也相違之仍許容之處長入作
毎事相豪入之次恐々謹言

十月二日　と　沙弥

十月二日

進上　衣鉢侍者禅師　御寮

御札之旨太祈之斯候雖然松閣業
入寺之無縁紀候者於貴宝名跡
此処和尚老衲不相法方丈
再墨之後未雑一筆奉存書畫




一二度京細東京細

方々より注文殺到

猶筆を執る暇なし

布袋竹の縁起











一二度京細東京細

方々より注文殺到

猶筆を執る暇なし

布袋竹の縁起

要脚[illegible]

料[illegible]

座敷[illegible]

八[illegible]茶桶茶巾茶杓

[illegible]湯瓶[illegible]

豆子楪子[illegible]

汁者豆腐羹辛辣羹雪林菜

薯蕷筍蘿蔔山葵寒汁菜者

繊蘿蔔煮染牛蒡昆布烏頭布

荒布煎黒煮蕗蕪酢漬茄子

酢菜胡瓜甘漬納豆煎豆[illegible]

[illegible]

神馬藻ヲ採ル其芸洲藁松葉薪

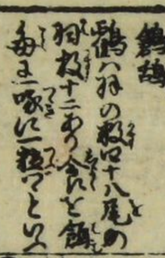
石花菜ヲ解ス

鳥賊ヲ捕ル

筆ヲ用ル注腹

浦山ヲ画ク

十月日



山澤の奥鳥

ありとうそのいはすめる鳥うとハ唯雉ばかりにたのみを交ゑ後ハ雌ばかりとろべし

# 雲華紙

仁王経華厳経

# 中風と卒頭痛

# 癰疔腫瘍

# 瘡瘍

# 一刹那と服式

# 写業補業

# 泊久会合

# 写経日記

# 十二月十日

鴨 鳧

鳧ハ形鴨ノ如クニシテ一廻リ小ク背ニ斑文アリ雌雄共ニ水ニ浮ミ遊ヒ能潜リ魚ヲ食フ

鳩



鳩ハ形ノ三種ノ別アリ尾短ク背ニ斑アリ羽ハ下ノ如シ

魚名ヲ呼ンデ魚ヲ乞フ

鯉 鯽

鮒 勦

鯉ハ形ノ美ナルモノニシテ背ニ鱗アリ頭ノ尾ニ近キ処ニ三十六ノ鱗アリ

# 十一月日

進上　貴宅御侍衆

初冬風冷之候、弥御安全珍重之至候、抑今日者、令興行候、雖有風情、不可有其興候、然者、明日者、可為晴天之由、陰陽師勘申候、仍為遊覧、明日者、可令興行候、定而可有御光臨候哉、此旨可得御意候、恐惶謹言、

十一月日　　磯部新兵衛尉

返事

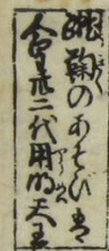
拝見仕候、抑今日者、令興行候、雖有風情、不可有其興候、然者、明日者、可為晴天之由、陰陽師勘申候、仍為遊覧、明日者、可令興行候、定而可有御光臨候哉、此旨可得御意候、恐惶謹言、

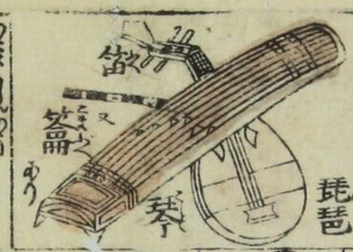
十一月日　　磯部新兵衛尉

歌連歌俳諧

立花

謡舞






の四方をでまわせ
よいほど十二代支那の
四神とものふうり

樂の始終よ
管弦の太鼓

數の神農の
測り給ふこと

# 經堂書籍之部

## 奴稼不識老農全書

## 生理參補全書

## 農務作時之說

## 國寧小兒保嬰撮要

## 激使宜保幼稚教訓集

## 送行初學必讀

## 儒家須知正誼

## 治平初學必讀

## 佛事勤行

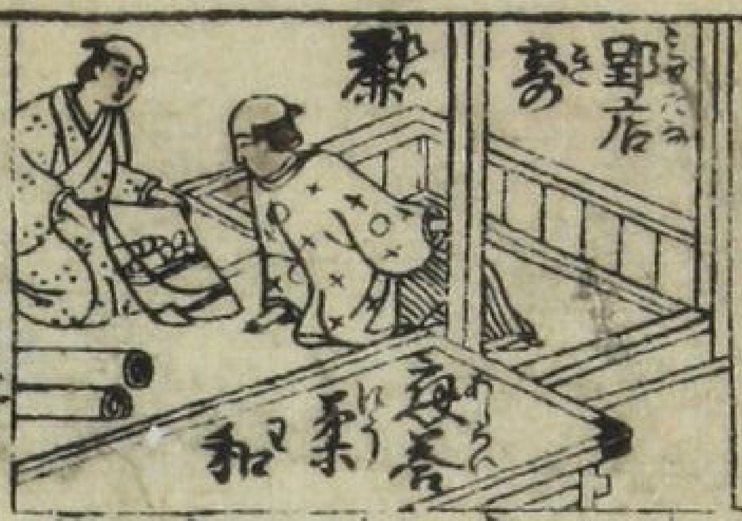
碁

碁は支那の伏羲帝
の作りたまひしと
いふ



碁石の形は烏曹
といふ

今の時分から…ろうの…ところも…めえし



民間法之利便定吉也一女雑流保吉貴
之珍利巨寶也万書自然豊一言遣乱
人字路致數書紙面筆満月色纏也

十二月三日　越前守殿江

蓬上　年人佐敷


寶暦十年庚辰　武江書林　江戸馬喰町二丁目

寛政二庚戌四月吉日　西村屋與八再板


伊呂半仁保へ止
千利奴流乎和加
與多礼曽津祢奈
良牟宇井乃於久
也末計不己江天
阿佐幾由女美之
衛比毛世須
武事精爲

大不成就日

| | | |
|---|---|---|
| 正七月 | 三日　十九日 | 十一日　廿七日 |
| 二八月 | 二日　十八日 | 十日　廿六日 |
| 三九月 | 一日　十七日 | 九日　廿五日 |
| 四十月 | 四日　十二日 | 廿日　廿八日 |
| 五十一月 | 八日　廿一日 | 十三日　廿九日 |
| 六十二月 | 六日　廿二日 | 十四日　三十日 |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 木性 | 伐 | 父 | 八 | 弥 | 兵 | 半 | 桜 | 川 | 虎 | 万 | 卯 | 武 |
| 同 | 波 | 品 | 猶 | 平 | 向 | 本 | 多 | 芳 | 梅 | 包 | 房 | 邦 |
| 火性 | 見 | 登 | 角 | 助 | 久 | 丸 | 合 | 光 | 加 | 光 | 虎 | 佐 |
| 土性 | 定 | 金 | 又 | 源 | 亀 | 元 | 菊 | 隣 | 実 | 針 | 歌 | 廣 |
| 金性 | 左 | 右 | 次 | 宝 | 里 | 利 | 仁 | 治 | 伊 | 吉 | 将 | 六 |
| 水性 | 与 | 一 | 伴 | 森 | 和 | 赤 | 宇 | 友 | 安 | 鉄 | 乙 | 又 |

子丑　甲乙　丙丁　戊己　庚辛　壬癸
寅卯
辰巳
午未
申酉
戌亥

受死日　正月　二月　三月　四月…


寶暦十一辛巳正月吉日
元祖西村屋與三八
武江書林
馬喰町
武丁目
西村屋與八再版